



大妻多摩中学校

二〇二〇（令和2）年度

## 入学試験問題（第二回）

### 【国語】

時間 50分

2月2日（日）

#### 【注意事項】

- 1 問題は18ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります（途中に省略があります）。  
字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

これまでは自分が実際に歩んできた道のりを書いてきました。こうして振り返ってみると、たしかに多くの人が行かないような場所や、体験しえないような行為をしてきたのかもしれませんが。このような経験によって、ぼくは世間から「冒険家」などと呼ばれることもあります。

しかし、辺境の地へ行くことや危険を冒して旅することが、果たして本当の冒険なのでしょうか？ そもそも「冒険」や「旅」には、いったいどんな意味があるのでしょうか？ あることをきっかけに、ぼくはよりいつそうそんなふうを考えるようになりました。

① 観光旅行に行くことと旅に出ることは違います。観光旅行はガイドブックに紹介された場所や多くの人が何度も見聞きした場所を訪ねることです。そこには実際に見たり触れたりする喜びはあるかもしれませんが、あらかじめ知り得ていた情報を大きく逸脱することはありません。一方、旅に出るといえるのは、未知の場所に足を踏み入れることです。知っている範囲を超えて、勇気を持って新しい場所へ向かうことです。それは、肉体的、空間的な意味あいだけでなく、  
② な部分も含まれます。むしろ、  
② な意味あいのほうが強いといってもいいでしょう。

人を好きになることや新しい友だちを作ること、はじめて一人暮らしをしたり、会社を立ち上げたり、いつもと違う道を通って家に帰ることだつて旅の一部だと思うのです。実際に見知らぬ土地を歩いてみるとわかりますが、旅先では孤独を感じたり、不安や心配がつきまといまいます。旅人は常に少数派で、異邦人で、自分の世界と他者の世界のはざまにあつて、さまざまな状況で問いをつきつけられることになりました。多かれ少なかれ、世界中のすべての人は旅をしてきたといえるし、生きることはすなわちそういった冒険の連続ではないでしょうか。

生まれたばかりの子どもにとって、世界は異質なものに溢れています。もともと知り得ていたものなど何もないので、あるがままの世界が発する声にただ耳を澄ますしかありません。目の前に覆いかぶさってくる光の洪水に身をまかせられるしかありません。そう

いった意味で、子どもたちは④旅人であり冒険者だといえるでしょう。歳をとりながら、さまざまなものとの出会いを繰り返すことによつて、人は世界と親しくなつていきます。やがて、世界の声は消え、光の洪水は無色透明の空気みたいになつて、何も感じなくなつていくのでしょうか。それは決して苦しいことではありませんから、世界との出会いを求めるときもなくなり、異質なものを避けて五感を閉じていくのかもしれない。そうして世界がすでに自分の知っている世界になつてしまったとき、あるがままの無限の世界は姿を変えて、ひどく小さなものになつてしまいます。そのことを否定するつもりはまったくありませんし、自分もそうならないとは限りませんが、⑤最後の最後まで旅を続けようと努力したいとぼくは思うのです。

現実は何を体験するか、どこに行くかということはさして重要なことではないのです。心を揺さぶる何かに向かいあつていか、ということがもつとも大切なことだとぼくは思います。だから、人によつては、あえていまここにある現実に踏みとどまりながら大きな旅に出る人もいるでしょうし、ここではない別の場所に身を投げ出すことによつてはじめて旅の実感を得る人もいるでしょう。

⑥ ぼくが冒険家という肩書きに違和感を抱く理由がわかつていただけでしょうか。《中略》

山や川や海や空や人間のあいだをほつき歩きながら、自分の内面をフィールドにした精神の冒険や想像力の旅を追求していくのがぼくの生き方です。地球上をくまなく移動しつつ、活字のなかに広がる世界へ没頭し、誰も到達したことがない未知の場所に行つてみたいと考えながら、誰もが知っている路上に無限の宇宙を探したいのです。

いま宇宙という言葉を使いましたが、空の上に広がる本物の宇宙には前々から興味を持っていました。<sup>注1</sup> NASAが撮影した月面の写真や宇宙から見た地球の写真を見たときに、自分もその場所に立つてみたいと強く思いました。<sup>⑦</sup> 絵空事ではなく、生きていくあいだに宇宙を旅することは可能だと思つていますし、そういった思いを持ち続けていればどんな形であれ実現に近づいていくということをぼくは知っています。

行ったことのない宇宙の旅は、いくつもの断片的な記憶から想像するしかありません。<sup>注2</sup> 酸素の薄い <sup>注3</sup> チョモランマの頂上で空を見上げながらその先にある世界を思い、気球で成層圏に近づきながら自分の身体に起こる反応を観察し、星明かりをたよりに静かな湾で一人 <sup>注3</sup> カヤックを漕いでいると、宇宙が自分から遠く離れた場所にあるということを忘れてしまうときがあります。ミクロネ

シアの航海者は海で生きるための卓越した知識と神話的な思考を組み合わせることによって、宇宙から届く星の光を自分の身体に取り込み、星の航海術と呼ばれる奇跡的な知恵を生み出しました。

彼らはおそらく宇宙が自分たちの外にあるものだとは思っていないでしょう。自分たちのなかにある宇宙を身体化したものが星の航海術であり、航海者はそれを受け継ぐことによって、宇宙を直観し続けているのだとぼくは思います。

太平洋を縦横に駆け回っていた巨大カヌーの原材料となる木を探して、ポリネシアの島々を旅したことがありました。なかでもニュージーランドの北島には、先住民であるマオリ族が大切にしていた原生林が今でも残されています。

この森がほかの森と違うのは、ニュージーランドの固有種であるカウリという大木があちこちに生えていることです。カウリの木はマオリの後に入植してきたヨーロッパ人らによって乱伐され、激滅しましたが、以前はカヌーを作るための建材に使用されていました。

森に入って数日が経ったある夜、頭上を見上げると、鬱蒼と茂った森の枝葉の先に天の川の広がりを見ました。あまりの星の多さに目がくらんで、星が浮いているのか、自分が星々のあいだに浮かんでいるのかわからなくなるほどです。木の幹や地面、大気などから原始の地球の息づかいが聞こえ、自分が何か大きな時間の流れに投げ出されてしまったかのように感じます。そのとき、この森がすべての森に、この空がすべての空へとつながっていく回路のように思えたのです。

スペースシャトルに乗って宇宙へ飛び出してみたいという願いをもつ一方で、ミクロネシアの航海者のように、海の上で⑧ 宇宙のなかに自分を入り込ませられる人々がいることを、ぼくは忘れません。ニュージーランドの原生林で感じた一つの森がすべての森であるという思いは、空の先にある宇宙と自分の身体のなかにある宇宙を共振させるためのヒントになると思っています。

〔石川直樹『増補新版 いま生きているという冒険』〔新曜社〕より〕

注1 NASA……アメリカ航空宇宙局。

注2 チョモランマ……一般的に「エベレスト」と呼ばれる山を、チベット語で「チョモランマ」という。

注3 カヤック……小舟の一種。

問1 ——線部①「観光旅行に行くことと旅に出ることは違います」とありますが、筆者によれば「観光旅行に行くこと」と「旅に出ること」とはどのように違うのですか。次の説明文の [A] ・ [B] に合う形で説明しなさい。その際、A・Bのどちらかに

必ず「未知」という言葉を用いて、それぞれ二十字以内で説明すること。

「観光旅行に行くこと」は [A] ことだが、「旅に出ること」は [B] ことである。

問2 [②] (二箇所あります)に当てはまる言葉として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 具体的      イ 個別的      ウ 時間的      エ 精神的

問3 ——線部③「光の洪水」とはどのようなものを比喩的に言ったものですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から

一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 目の前にあふれている、新鮮で異質なもの。      イ 目の前に立ちほだかる、生命を脅かすもの。  
ウ 目の前を通過していく、言葉としての情報。      エ 目の前の視界や認識を遮る、強固な障害物。

問4 ④ に当てはまる言葉として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 仮りの      イ 究極の      ウ 不安な      エ 未熟な

問5 ——線部⑤「最後の最後まで旅を続けようと努力したい」とありますが、具体的にどのようなことをするのですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア あえて危険に身をさらして、自分が生きていることを実感すること。  
イ 人がまだ訪れない未知の場所に行き、文章や写真で人々に報告すること。  
ウ 五感を使って、自分の周りにある心を揺さぶるものに出会い、親しくなること。  
エ いつまでも子供の心を忘れることなく持ち続け、あちらこちらを歩いて回ること。

問6 ——線部⑥「ぼくが冒険家という肩書きに違和感を抱く理由」とは、どのようなものですか。ここまでの記述全体を踏まえて、《……から》につながる形で答えなさい。

問7 ——線部⑦「絵空事」の読みを平仮名で答えなさい(解答欄A)。また、この言葉の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい(解答欄B)。

- ア きわめて遠くで起こったこと      イ 実際にはありそうにないこと  
ウ 内容が全くなく無意味なこと      エ 非常に美しく理想的なこと

問8 ——線部⑧「宇宙のなかに自分を入り込ませられる」とありますが、「宇宙の中に自分を入り込ませる」とはどのようなことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分の精神や身体と宇宙とのつながりを実感し、不可分なものとして意識すること。
- イ 宇宙を人間の存在と対比的に捉え、人間がコントロールするものとして意識すること。
- ウ 人間という有限の生命を持ったものを否定し、宇宙と一体化したものとして意識すること。
- エ 地球上の人間のあらゆる営みから、宇宙にアプローチする学問的方法の探究を意識すること。

**問9**

この文章の後半で挙げられているエピソードのように、「自分の周りにある身近なもの、ささやかなもの」あるいは「旅先で見  
たもの」が、自分の考え方を大きく変えた、という経験を、百字以内で書きなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります（途中に省略があります）。  
字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

同好会が部に昇格するための条件は至極単純である。所属人数が四人いればいい。しかしそれが遠い。

今年初めての部活勧誘の成果はゼロ。たった一人の新人部員、厳密に言えば新人同好会員も獲得出来なかった。何人か見学に来てくれた子もいたが、入会には至らなかった。

部に昇格しなければ予算は①の涙ほどで、一回花を買えば無くなってしまうほどである。人気クラブには沢山の予算が付き、設備も充実している。そのお陰もあってさらに成果も出る。野球部は昨年東京大会のベスト4まで進出していた。それもあって今年に入部希望者も一段と多かつたらしい。

このままでと有力クラブとの格差はどんどん開いていく。四人のメンバーを揃えれば部に昇格出来るのだが、このままでと昇格どころか、春乃の卒業と同時に消滅してしまうかもしれない。何とか盛り上げる方法はないか、と考えていた春乃に転機が訪れたのは、昨年の夏のことであった。

その時も香川に帰省しており、そのきつかけをくれたのもまた祖母であった。茹るような暑さの中、縁側に座り、弟と西瓜を頬張っていた春乃の元に、祖母が一枚のチラシを持ってきてくれた。

「春ちゃん、こんなのやるみたいよ」

「全国高校生……花いけバトル？」

春乃は上から下までじっくりと目を通していく。それを祖母は微笑みながら見守っていた。

チラシには春乃と同年代の女の子が花をいけている写真、そして開催日程や場所などが書かれている。全国の各地区で予選が行われ、それを突破した者が全国大会が開催される。野球やサッカーの大会とよく似ている。そして全国大会が催される、野球における甲子園ともいべき場所が、ここ香川であるらしいのだ。



「全然知らなかった……」

「まだ二回目って書いてあるからね。お祖母ちゃんもさつき近所の魚屋さんに聞いて知ったの。どう？ これに出れば華道同好会をアピール出来るんじゃない？」

祖母は茶目つ気たつぷりに少し首を傾ける。

「おもしろそう！ 見てみたい！」

### 《中略》

そしてその翌日、春乃は祖母と共に、全国高校生花いけバトルの決勝戦を見に行ったのだ。

大会は県民ホールで行われる。

「凄い……こんなに」

そこに入ってまず驚いたのは、多くの観客が席を埋めていたことである。出場者の家族もいるだろうが、明らかに春乃と同年代と思われる子や、中学生や小学生くらいの年頃の子もいる。② 自分が学校で肩身の狭い思いをしていることに照らし合わせ、こんなに人気があるとは思っていなかった。

「お祖母ちゃんもウキウキしてきた」

隣に座った祖母は老眼鏡を取り出して、大会のパンフレットを読みながら言った。

定刻になってセレモニーのあとはいよいよ「バトル」が始まった。二人一組で参加、制限時間は5分。八十種類以上の花がステージの花道、その下にまで並べられ、エントランスまで届いていた甘く爽やかな香りが充満している。

ここに集まったのは予選を勝ち抜いてきた全国の猛者たち。ほとんどが春乃と同じ女子高生だが、その中の一つだけ、③ 異彩を放っている組があった。

「男の子……」

男子二人の組である。うち一人は息を呑むほどに肌が白く、切れ長の涼やかな目をしており、全身から気品のようなのが滲み出ている。

「京都清北高校の生徒さんみたいね。組の名前は『華風』って書いてあるわ」

祖母はパンフレットを指差しながら言った。祖母が組と表現したのはチーム名のことである。各高校から3チームまで出場可能というルールもあるからか、チームに名前を付けて参加するのだ。

「男の子でも出るんだ」

「お祖父さんが生きていたら、きつと応援したわね」

最初は珍しいといった程度でしかなかったが、試合が進むにつれて別の感想を持つようになった。

——凄い。

その一言に尽きる。京都清北高校「華風」は、各地の予選を突破して来た並み居る強豪を、全く寄せ付けずに撃破していくのだ。

勝負は識者の審査員、そして観客が決める。入場の時に手渡された団扇の表裏が赤と青に分けられており、ジャッジタイムの時にこれを掲げるのである。京都清北高校「華風」は圧倒的で、観客の九割以上を一色に染めている。何を隠そう春乃もずっとそちらに投票してきた。

二人とも相当な実力の持ち主とわかるが、うち一人、色白で切れ長の目の青年は特に圧倒的であった。

まず何より作品が美しい。まだまだ勉強中の春乃でもそのフォームの美しさ、奥行き、色合いのバランスが飛びぬけていることがわかる。

強さの理由はそれだけではない。花をいけていく所作が極めて美しいのである。5分の制限時間ともなれば焦りが出てきてもおかしくないが、そのようなものは一切感じられない。顔に汗の珠一つ浮かべず、花を扱う手は④春風を彷彿とさせるように優雅に、それでいて機械のように無駄なく動く。その流れる所作一つ一つに観客は魅了され、中には感嘆の溜息を漏らしている者もいた。

「本当に凄く……」

春乃が呟いた声に反応し、隣に座っていた観客が声を掛けて来た。歳は四十前後、母と同じくらいであろうか。上品なおばさんと  
いった感じである。

「素晴らしいでしょう。秋臣さん」

「はい。お身内の方ですか？」

「とんでもない。私の師の御子息なの」

「というと……華道の？」

「ええ、そう。もう一人もお弟子さんの息子さん」

なるほど、華道の師匠の息子だというのならば、これほど上手なことも納得出来る。おばさんは誇らしげに微笑んで続けた。

「香月院流のね」

「やっぱり」

流派に関しての驚きはなかった。華道といえば香月院が真っ先に思い浮かぶほど、この流派が華道の世界を注1席卷せつけんしている。華道をしている人実に八割が、この流派に属しているといってもいい大家である。春乃が習い始めた近所の華道教室の先生も、この香月院流の免許を得て開いている。そういう意味では春乃も、香月院流の末の末に属しているといってもよい。

「秋臣さんは香月院流の将来を背負って立つ方よ。丸小路家百年に一度の逸材いっさいだと言われているの」

「丸小路……あの丸小路家ですか——」

思わず声が大きくなりかけたが、近くの観客が振り返ったので抑えた。

「そう。香月院流家いんもと元、丸小路家の嫡男ちやくなん。丸小路秋臣さんよ」

まさしく華道界の⑤プリンス、春乃からすれば雲の上の存在である。学年は春乃と同じ高校一年生。幼いころから母から手ほどきを受け、その実力はすでに香月院流の師範たちにも引けを取らないという。

そのことを聞いて改めて見ると、壇上だんじょうで次の戦いに備える秋臣は、公家くけのような気品を備えているように春乃には見えた。

決勝戦でも京都清北高校「華風」は圧倒的であった。対戦相手をダブルスコアで打ち破り優勝を果たしたのである。

《中略》

表彰式が終わり、大会に出場した生徒たちが、客席で見ていた保護者や学校関係者のところへ降りてくる。帰ろうと腰を浮かせた春乃に、先ほどのおぼさんが提案した。

「ねえ、お嬢さんも華道を習っていらつしやるのでしょうか？ よければ秋臣さんにご挨拶なさる？」

「いいんですか？」

「ええ。ついでにいらつしやる」

祖母はにこりと微笑んで、待っているからいつてらつしやいと書いてくれた。

おぼさんの足取りは羽が生えているように軽く、付いてきている春乃を残してずんずんステージの近くへ降りていく。後で思えば

⑥ これはおぼさんの好意ではなく、⑦ だけなのかもしれない。

「秋臣さん」

おぼさんの呼びかけに、花束を抱いた秋臣が振り返る。

「木原さん、おいでいただきありがとうございます」

秋臣は、<sup>注2</sup> 懇<sup>いんぎん</sup>に礼をした。その振る舞い一つとっても高校生らしからぬ気品が漂<sup>ただよ</sup>っている。

「ご挨拶したいという子がいらしているの。秋臣さんと同じ年で、香月院流の門下の子よ」

《中略》

「はじめまして。大塚春乃と申します」

自分でも知らぬうちに緊張しているのか、お辞儀がややぎこちなくなかった。それを笑うことなく秋臣は丁寧<sup>ていねい</sup>に応じる。

「こんにちは。丸小路秋臣です。良いお名前ですね」

「ありがとうございます……」

恐縮して再び頭を下げる。

「うちの流派で学ばれているとか」

「はい……でも、まだ始めたばかりで」

「誰でも初めはそうです。高校生から始めたのなら早いほうですよ。きっと上達すると思います」

「あ、あの……一つお尋ねしてもいいですか？」

花いけバトルを見ていた時から、もし秋臣に訊けるならば訊いてみたいことがあった。

「どうぞ。何なりと」

秋臣は唇を綻<sup>くちひら</sup>かせて、少し首を傾けた。

「同じ種類のもので使う花と、使わない花を分けておられましたよね……あれは何を見ていたんですか？」

「ああ……もう駄目な花が混じっていたので除いていたのです」

秋臣は丁寧に解説してくれた。用意された同じ種類の花にも個体差があり、中にはすでに弱っているものも混じっているらしい。

観客席はやや暗く、置かれた花の状態が正確にはわからない。加えて時間もあまりないため、取り敢えず多めに取り、明るいとこ

でじっくりと見て、いきの良い花だけを使うように選別したらしい。

普段、丸小路家には質のいい花ばかりが納品されるらしく、自然とそれらが見極められるようになったと秋臣は言った。

「そういうことなんですね……」

「どうかしましたか？」

秋臣は怪訝<sup>けげん</sup>そうに首を捻<sup>ひね</sup>った。

「いえ……まだまだ使えそうな花だったから、少し可哀そうだったって」

「遠目にはわからないかもしれませんが、明日には萎しおれてしまうのです」

「でもまだあと一日は元気に咲く姿を皆に見て貰えるなら……」

秋臣がきよんとした表情になつていたので、春乃は失礼に当たったかと、慌あわてて言葉を継いだ。

「すみません。私の華道同好会は本当に予算が無くて、いつも売り物にならない花を頂いて練習しているので、そんなことを思っただけです」

秋臣は穏やかな笑みを浮かべて頭かぶを振った。

「大塚さんは花を大切にしておられるんですね。花がお好きな証拠です。僕もそうでした」

「そう……でした？」

過去形なのが引つ掛かり、また余計なことを口走つてしまった。秋臣の笑みは一変して苦くなる。

「今も好き……ですがね。大塚さんの話を聞いていて、花に接し始めた頃を思い出したのです」

香月院流の跡取りともなれば、花とずっと向き合っていなければならず、色々と思うところがあるのかもしれない。ならば猶なほ更さら気になることもある。

「どうしてこの大会に出ようと思われたのですか？」

「どうしてとは……」

秋臣には質問の意図が伝わらなかつたらしい。春乃は思い切つて訊いた。

⑧「どうして香月院流の家元の方なのに参加なさつてるんですか？」

「出てはいけませんか？」

秋臣は細い眉まゆを開いて尋ね返す。

「い、いえ！ そういう意味じゃなく……この大会は審査員の大半がお客さんだから、好みによつては……」

「負けることもあると」

秋臣がはつきり口にしたから、春乃はきゅっと唇を結んでしまった。秋臣は微かに笑みを浮かべつつ続けた。

「香月院流は負けませんよ。僕が出場を決めたのもそのためです」

「でも万が一……」

「そんな強敵がいるならば是非戦ってみたい。そうだ、大塚さんも出場してみたいかがですか？」

「そのつもりです」

春乃はすでに来年出場することを心に決めていた。華道同好会を広めるためというのもあるが、この会場に来て花の素晴らしさ、それをいける所作の美しさに改めて魅了されたのである。そう思うようになったのは、眼前のこの貴公子の影響が大きい。

「それは楽しみです。僕を倒してくれませんか？ あ、でも大塚さんが勝っても香月院流か」

「そうなりますね」

秋臣は人差し指で眉間を掻き、照れ臭そうに笑った。その顔はステージ場で見せた優雅な表情とは打って変わり、普通の高校生のように見える。⑩ 春乃は親近感が湧いてくすりと笑った。

「是非、来年ここで」

「はい。予選を突破出来るように頑張ります」

（今村翔吾『ひゃっか！全国高校生花いけバトル』〔文響社〕より）

注1 席巻——ものすごい勢いで、勢力を広げること。

注2 慇懃に——礼儀正しく、丁寧に。

問1 ①に当てはまる言葉として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 犬      イ 鬼      ウ 鹿      エ 雀

問2 線部②「自分が学校で肩身の狭い思いをしている」とありますが、春乃が所属している華道同好会は、具体的にどのような状況にあるのですか。次の空欄に当てはまる形で、三十一字以上四十字以内で答えなさい。

状況。

問3 線部③「異彩を放っている」とは、具体的にどのようなことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 色や匂いの素晴らしい、特別に目立つ花を使っている、ということ。  
イ 華道の常識にとられない独創的な生け方をしている、ということ。  
ウ 男性で、しかも相当な実力と品位とを兼ね備えている、ということ。  
エ 普通の高校生が着ないような変わった服装をしている、ということ。

問4 線部④「春風を彷彿ほうふうとさせる」とありますが、これはどのようなことですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 春風を必要とする、ということ。      イ 春風を自然と連想する、ということ。  
ウ 春風が巻き起こりそうだ、ということ。      エ 春風の中に身を置いている、ということ。

問5 線部⑤「プリンス」とほぼ同じ意味で用いられている言葉を、線部よりも前の本文中から十字で抜き出しなさい。



問6 — 線部⑥「これ」とは何を指していますか。次の空欄に当てはまる形で答えなさい。

□ 機会を、春乃に対して作ってくれたこと。

問7

□ ⑦

には、どのような内容が入ると考えられますか。十五字以上三十字以内で答えなさい。

問8

— 線部⑧「どうして香月院流の家元の方なのに参加なさってるんですか？」とありますが、これはどのようなことを言おうとしている疑問なのですか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 名門の流派を継ぐ身として、もっと高いレベルの人たちを相手に修業しなければいけないはずなのに、いくら同年代とはいえ高校生の大会に出場しようとしたのはなぜなのか、ということ。

イ 大きな流派のトップになる予定の立場なのだから、負けた時のダメージを考えればこういう大会に出場するのは危険なはずなのに、それでもあえて出場しようとしたのはなぜなのか、ということ。

ウ 名門流派の中心としてやらなければならないことが山のようにあり、地方都市の大会になど出場している暇はないはずなのに、それでも時間を作ってわざわざ出場しようとしたのはなぜなのか、ということ。

エ 自分のところは既に大きな流派になっていて、これ以上弟子を増やす必要など全くないので、流派の宣伝の方法として間違っているのに、それでもこの大会に出場しようとしたのはなぜなのか、ということ。

問9 — 線部⑨「僕を倒してくれますか?」と言った時の秋臣の心情に最も近いものは次のア～エの中のどれであると考えられますか。一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 負けること自体は望ましいことではないのだが、この女性になら負けてもいいと、真剣に思っている。
- イ わざと刺激的な言葉を言い、挑発に乗ってきた人を圧倒して、自分の実力を誇示したいと望んでいる。
- ウ これまでずっと、負ける状況を周囲が作ってこなかったので、一度負けてみたいと、心の底から思っている。
- エ 自分が負ける気はしないのだが、花を愛する人と高いレベルで戦ってみたいと、ライバルの出現を願っている。

問10 — 線部⑩「春乃は親近感が湧いてくすりと笑った」とありますが、ここまでの、秋臣に対する春乃の心情の変化を説明した次の文の

の文の  A  C に適切な言葉を当てはめなさい。

最初は、秋臣が  A  B けれども、話をするうちに

C ところがあると分かり、親近感が湧いてきた。

三

あとの問いに答えなさい。

問1

次の①～④の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 前社長からタイニンの挨拶があった。
- ② 事態をシユウシユウするために動き回る。
- ③ 日本はチアンのよい国だ。
- ④ 薬局でナイフク薬を処方してもらう。

問2

ある漢字辞典で「令」という字を引いてみたところ、次のような説明がありました。

令

5画

意味

① 言いつけ。言いつける。

号令・指令・命令

② おきて。決まり。

条令・法令

③ よい。きよらかで美しい。

令名

④ (ほかのことばの上について)あいて

に關係のある人を尊敬するという言葉。

令嬢・令息

同様に辞書を引いたところ、次のような説明がされていた漢字(A)～(C)がありました。その漢字はそれぞれ何か、答えなさい。

(A)

7画

意味

① よびかけや問いにこたえる。② ほかからはたらきかけを受けとめて、それに対する行動をする。③ ちようどよい。つりあう。

(B)

9画

意味

① 数える。かんじょうする。② 数量をはかる道具。③ くわだてる。はからう。

(C)

8画

意味

① かえる。かわる。取りかえる。② たやすい。かんたんだ。③ うらない。うらなう。

以下余白

